

家族全員で長い間大切にしてきた 沖縄愛楽園のみなさんとのふれあい この宝物をみんなでもっと大きく育てたい

三輪田学園中学校・高等学校 山下恵理子



山下恵理子さん

るで故郷のような存在。お母さんが大学生の時に訪ねたことがきっかけで、山下さん一家は20年近くにわたってクリスマスにはほとんど毎年、家族みんなで愛楽園を訪ねし、糸数のおじさん、おばさんとの心のふれあいを育ててきました。愛楽園との「縁」をみんなで大切に守ってゆくこと、これが家族一人ひとりを結びつける強い絆でもありました。

1歳の時から愛楽園に通っている山下さんにとっては、そこはただ南国の楽しいつろぎの場所でした。小学生になってハンセン病とは何か、愛楽園がどういう場所かを

知るまでは、愛楽園の人々が被ってきた悲惨な歴史や、まだ残る差別の現実を知り、大きな悲しさ、シヨック、憤りを感じました。中学生になって、国のハンセン病隔離政策による沖縄での被害実態をまとめた「沖縄県ハンセン病証言集」(2006年発行)を読みました。患者の方々の、筆舌尽くしがたい苦難の歴史を知れば知るほど、いつも暖かく優しく迎えてくれる糸数さんの、笑顔に秘められた心の強さに計り知れない敬意を覚え、生きることの尊厳を教えられました。愛楽園はまさに、山下さんの心の成長を見守ってくれたゆりかごでした。

「差別と偏見は無知からくる。」愛楽園はこの言葉の重みを山下さんに問いかけてきます。愛楽園の歴史と現実をみんなにも知ってほしい。そういう思いも込めて、学校で愛楽園との絆について語るようになりしました。「証言集」も学校の図書館に届けました。今では学年で山下さん一家と愛楽園の絆を知らない人はいません。今度のクリスマスには三輪田の同級生と一緒に訪問します。中1の時に愛楽園のことを初めて作文に書いた時から、当時の担任でもある多田先生は、一貫してこういいう山下さ



てくれた糸数のおじさん、おばさんに初めて書く手紙と共に、沖縄・屋我地島にある国立療養所沖縄愛楽園は、ハンセン病療養施設としての歴史を歩んできました。山下さんにとって愛楽園はま

ん最大の理解者です。望月教頭も「自分の意見を持って、地道に自分の生き方を見つけていく、そんな山下さんを学校としても応援しています。」



私が学校に届けた「証言集」。図書館でいつでも閲覧できます。



三輪田学園中学校・高等学校(東京都千代田区)

父母と兄たちと。愛楽園との絆は私たち家族の絆でもありました。



2007.03.29



最大の理解者である多田先生と。私が学校で愛楽園のことを語るきっかけを与えてくださいました。

小2の時、愛楽園の裏の海で。こんなに美しい海に秘められた悲しい歴史のことはまだ知りませんでした。



2歳の時、2回目の愛楽園。やさしい糸数のおばさん、兄たちと一緒に。

